No.9 January 1995

UIFA JAPON NEWSLETTER

■主な内容

年頭のあいさつ
日韓シンポジウムの報告
韓国からの女性建築家たち
講師・コーディネーターからのメッセージ
韓国側講師一行の東京見学記
参加者・通訳からのメッセージ
ドラトゥールＵＩＦＡ会長来日記
役員会の報告

■年頭のあいさつ

会長　中原暢子

あけましておめでとうございます。

昨年中は皆様のお力で、UIFA JAPON誕生２年目として様々な行事を行うことができました。特に印象に残っておりますのは、日韓ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑが開催できたことです。丁度国際家族年でもあり、東京女性財団や多くの企業からの援助も頂けて、記録すべき大事業ができました。ご報告申し上げると共に、お骨折り頂いた方々に改めて感謝する次第です。成果としましては、隣国である韓国の女性建築家の方々と知り合え、どんな状況でどんな仕事をしていられるかが判ったことかと思います。鈴木成文先生をはじめ、韓国の金鎮愛先生の基調講演、その他両国の女性建築家の方々のﾊﾟﾈﾙﾃﾞｨｽｶｯｼｮﾝ などとても有意義でした。３月には完成する予定の報告書を出席されなかった方にもお目通し頂きたいと存じます。

また11月末、UIFA会長のｿﾗﾝｼﾞｭ･ﾄﾞﾗ･ﾄｩｰﾙ さんが国際観光振興会、国際ｺﾝﾍﾞﾝｼｮﾝ 誘致ｾﾝﾀｰの招きで慌ただしく来日されました。東京には２日しか滞在されず、都合のつく理事の有志でお目にかかりました。彼女はとても御元気で、1996年の多分９月にブタペストで第11回国際会議が開催されること、第12回は日本でと前向きなお話ばかりで帰られました。

今年は、いよいよ1998年日本での国際会議開催の準備委員会を発足する予定です。若い方のお力がどうしても必要なので、是非ご協力をお願い致します。

■日韓交流シンポジウムの報告

吉田洋子

10月22日に氷川会館で日韓交流シンポジウムを無事開くことができました。韓国まで事前準備に行き、盛況に終わりました。

シンポジウムの参加者はパネラー５名、韓国からの来賓８名、招待者等６名、会員37名、非会員42名、合計 103名でした。シンポジウムの後、懇親会も開き、こちらの参加者は58名でした。

シンポジウムの中でのパネルディスカッションや懇親会を通して韓国の女性建築家の方たちと仕事や生活情報の交流ができたことは、UIFA JAPONにとっても大きな収穫でした。東京の保育園などの見学や横浜へも韓国の方たちを御案内し、その間も交流がなされました。

韓国の参加者は以下の10名の方でした。（金鎮愛、李信玉、池淳、任仁玉、金福守、朴研心、金仁淑、金華連、孫太王、襄是花　敬称略）（通訳５名）

なお、このシンポジウムは東京女性財団の助成により開くことができました。また多くの企業等（企業14、個人１）の寄附金の協力もありました。徐々にですが、世界女性建築家会議の日本誘致を目指して、様々なネットワークが広がってきていることを感じる日韓交流シンポジウムの開催でした。

遠い韓国から来てくださった皆様、パネラーの鈴木先生、小谷部先生、中島先生、本当にありがとうございました。

■韓国からの女性建築家たち　　東　由美子

最近の韓国の発展ぶりはめざましいと聞いてはいたものの、今回短期間ではあったがソウルの街を訪問し、現地と東京で韓国の女性建築家たちと交流することができ、その発展ぶりを実感することができた。

特に女性建築家たちの活躍ぶりは日本以上であるように思う。前会長の池淳さんは80名の所員を抱える設計事務所の所長であるとお聞きしたし、講師の１人金鎮愛さんはアメリカ留学の経験から実にアメリカナイズされた堂々たる態度であった。仕事も範囲も住宅のみならず、規模の大きなハウジング・プロジェクトや公共建築に及んでいるようだ。

一方で儒教の精神は日本よりずっと残っているようで、朴研心さんの発表にもあったように家族制度と自己表現の間で悩んでいる女性も多いようだ。仕事を続けるために二世帯住宅に住む世帯も増えているらしい。講師の金鎮愛さんも朴研心さんも御自身が多世帯住宅にお住まいの様子をスライドで見せてくださった。

また、韓国の女性建築家たちの日本の建築や都市に対する関心の大きさには驚いた。新建築など雑誌や、谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」などを実によく読んでいて、いろいろ質問されるので返答に窮するほどであった。それに比べ私の韓国建築界や韓国文学の知識の稀薄なこと。

ただし、鈴木成文氏が指摘された東アジアの伝統的住まい方の重要性への反応が少なかったように感じられ、彼女たちの日本への関心が、無批判な日本の都市や建築の模倣につながらなければよいが、と少々心配にはなったシンポジウムであった。

■講師からのメッセージ

日韓シンポジウムに招かれて　　鈴木成文

以前、ポドコという女性建築技術者の集まりがあり、女性の働く権利を守って地味ながり着実に活動していた。建研連（建築研究団体連絡会）を通じて親しくしていたその頃からのお付き合いで、今回のシンポジウムもお引受することになった。

100人を超す女性の中に男性一人が招待されたのは光栄であったが、「家族・社会・住まい」という広範な主題が果してシンポジウムになるのかどうか危ぶまれた。それを司会の松川さんの腕で、巧みにそれぞれの方の特色を引き出されたのは流石であった。

幅広い主題であったからパネラーの話も勝手な方向を向き、アメリカ流の抽象的一般論あり、コレクティブハウスあり、自らの設計体験あり、多様で面白いと言えば言えるが司会者泣かせだったろう。私はこの機会に、戦後日本の都市住居の流れの中で、いわゆるモダンリビングを作りだしたのは核家族専業主婦の大群の出現ではなかったかという考えをまとめてみた。

このシンポジウムを支えたいちばんの力は留学生たちであった。住居についてはむしろ専門の方もあったろうに、専ら通訳に徹しておられたのは立派だった。

韓国はまだ男性支配、長老支配の社会のようだ。女性が建築界に立場を築くためには、肩を張って自らを押し出さねばならないのだろう。若手の方々の態度にとくにその意気込みが感じられたが、それが裏返しに留学生への態度にもなっているように見えた。しかし女性には女性の特質もあろう。韓国女性建築家の今後も、留学生をはじめとする実力を備えた次世代の人々によって更に発展するに違いあるまい。

日韓シンポジウムに出席して　小谷部育子

1994年もあと一月程というとき、愛知県の中学生がいじめを苦に自殺をし、その報道後数日にして同じく愛知県、そして福島県でもいじめを理由に中学生が自ら命を絶った。この衝撃的な連鎖事件は、子供の社会で今何が起こっているのか、次代を担う子供達の成長を助けるはずの家庭（親）、学校（先生）、社会（文明）はどれほど病んでいるのか、このアジアの経済大国に深刻な波紋を投げかけた。94年は国際家族年でもあり、超低出生率、超スピードの高齢化、という現実にも対応して、子供、女性、高齢者、家族、は年間を通してテレビ番組や特集記事の人気のテーマだったと言ってよいだろう。にもかかわらずと言うべきなのか、だからこそと言うべきなのか。子供の権利条約批准、個性を伸ばすゆとりある教育、様々なライフスタイルの選択、児童・高齢者福祉などがマスメディアで盛んに取り上げられる一方、他者への無関心、弱者いじめ、自己決定と責任回避などを容認、助長する社会の風潮がありはしないだろうか。社会がどのように変化しても人間の生活は文字通り人との関係なくしては存在しない。住まいの問題に引き寄せて考えた場合、誰もがより自由に自分らしく生きるために、家族と、仲間と、隣人とどのような自立共生－each and together －の精神的・物理的環境を構築するかが問われているのだ。私はパネラーの一人として、コレクティブハウジングの概念と福祉先進国であるスウェーデンの最新事例を紹介したが、我が国だけでなく、伝統的社会が急激に変化しつつある韓国においても、21世紀の住まい方の一つとして有効な概念であり、住まいの形態であることを確信した。

女性視点からの共通の課題　中島明子

日本に最も近い国でありながら、そして親しい友人がいるにも関わらず、私は韓国（南朝鮮）に対しては不幸な歴史のために構えてかかならければならないという思いを長い間持ち続けてきました。

訪れたのはたった一回です。が、UIFA JAPONのシンポジウムに参加させていただくことができ、女性の視点、それも“よりよい居住環境の創造と改善”という共通の目的を通して、共感しあい、理解しあい、心温まる交流が可能なのだということを感じました。

シンポジウムでの何よりの成果は、今後私たちが考えるべき共通課題が浮かびあがったことだと思います。

その第一はシンポジウムの中でも議論になった高層住宅の課題です。大都市集中にともなう住宅の高層化は、恐らく21世紀の重要なテーマになるでしょう。

第二は、家族形態の近未来と居住形態のアジア（日本と韓国）における課題です。欧米における個人の人件と自由から出発する視点と、アジアにおける家族形態をどのように考えていくかという点です。

第三は、女性の社会進出にともなう条件整備（保育所）です。このテーマはUIFA JAPONの会員自らの体験として、また専門家としてかかわってきた経過があり、是非とも交流したいと思いました。

私にとって、94年の前半はイギリスとデンマークの、後半はアジアの人々との交流の中で、家族・子どもの住環境を考える貴重な機会をもつことができました。

末尾になりましたが、このような刺激的で魅力的な機会を作って下さったUIFA JAPONの皆様、そして通訳をして下さった若い方々に、心からお礼を申し上げます。

■コーディネーターからのメッセージ　松川淳子

午前10時30分から始まったプログラムは、鈴木先生、金先生による基調講演二題と、昼休み1時間をはさんで3つの事例発表とプレゼンテーションの連続で進んだ。

「パネルディスカッションまでに聴き手が疲れて退席してしまうのではないか」と心配しなくもなかったのだが、パネルディスカッションが始まってみると、退席者もなく、質問用紙の山がこのシンポジウムに対する関心の高さをうかがわせた。

短いコーヒーブレイクの間にたくさんの質問を整理するのも大変だったが、根本的な考え方について討論したいというものから細かな事実関係やデータを知りたいというものまで、質問の幅の広さにもびっくりしてしまった。

講師の方々とは、事前打合せのときから、あまり質問が出なければいくつかのテーマについて相互の討論をしていただき、会場からたくさんの質問が出ればそれを中心に答えていただくというこになっていたのだが、いうまでもなく後者のやり方でやってしまった。細かな事実やデータを尋ねるのは懇親会のときにまわして頂いて、考え方についての質問にしぼってとりあげさせて頂いたつもりであるが、それでも大半の質問はカットせざるを得ないという始末だった。

スピーカー側にも、聴き手側にも話し足りないという気持ちを残してしまったのではないかという気もする。建築を通じての日韓親善という意味はあったと思うが、やはりもう少しシンポジウムのテーマをしぼらないと議論が深まらないという反省が残っている。

■韓国側講師一行の東京見学記

東京 ― 10月24日は文字通りの小春日和。午前中に公私保育園2ヵ所、午後は都庁舎へと強行軍だ。慣れない会話で大勢の誘導に戸惑いつつ、千代田区立いずみ保育園へ。公共施設整備計画の一環で、1987年に建設された幼・小学校、教育研究所、区民図書館、温水プールまである理想教育を目指した近代施設だが、合築のメリットが生かされていない。江東区のキリスト教精神に根ざす老朽化した私立神愛保育園は1941年に創立。園長の笑顔、身障者も混じる子供達の伸び伸びした姿、歓迎の催しに愛情溢れた豊かな保育を感じた。韓国女性の社会参加に保育所は大きな課題で、参考になったと喜ばれた。午後は都庁へ。渡辺理事の案内で住宅展、展望台、防災センター等見学し、写真片手にキラキラ輝く皆と都民広場で解散した。（正宗量子）

横浜 ― 動く歩道で日本一高いランドマークタワーへ。34階にあるTOTOショールームから、横浜の港や官庁街や駅、川崎の工業地帯を一望し、MM21の施設を上から眺める。建築的には魅力はないが女性の支援センターである ﾌｫｰﾗﾑ横浜を見学。保育施設がある会議室、子連れで参加できるサークル活動、相談ｺｰﾅｰは、保育園がない韓国の女性にとって興味ある施設のようだ。午後は国際会議場を見学。インテリアの管理をされたｷｬﾛﾙさんより、日本と米国、建築とインテリアの間の摩擦を聞いていただけに、大胆に色を使ったインテリアは素晴らしい。特に外国人にこの仕事を依頼した日本人の精神構造を見習いたい、韓国は外国人に設計依頼することはなく排他的、と初代会長さんが上手な日本語で話されたことが印象的でした。（小渡佳代子）

■参加者からのメッセージ

すまいのつくり手より　後藤正行

私は日本・韓国共通した住まいとしての痴呆性老人のターミナルケアを含めたグループホームを考えたい。住み慣れた地域でいつまでも住み続けたいと誰もが願う。しかし寝たきり、痴呆を含む要介護老人が急増している。益々核家族化が進み、在宅での介護には自ずと限界があり、仮に頑張っても痴呆を増すばかり。

公的介護とて制約がある。これが重度だと仕方なく精神病院行きとなり隔離され、中度でも仮に入れても老人病院ではベッドに縛られる。これは人権問題である。そこでグループホームだが、北欧では寝かせきり老人の概念はない。質の高いケアワーカーと7，8人の小人数のグループホームにてリーズナブルな日常空間の演出による生活で老人の表情は柔和である。もっとも30年間試行錯誤した結果である。つまり、痴呆性老人を安心させることがキーポイントであり、そのために可能な限り家庭環境に近い日常生活を演出することである。建築に携わる我々はもはやハードよりケアを重点としたソフト面を磨くセンスが求められている。

■通訳からのメッセージ

留学生からみた両国のすまいの考え方　李　賢姫

留学して良かったと思われるのは、その国のすまいが体験できたことである。特に建築を心している留学生には何より貴重な勉強になる。私にとって日本の住まいの体験は、住まいそれ自体との出会いであると同時に、忘れていたまたは自覚しなかった母国の住まいの良さを発見するチャンスでもあった。それは誰もができることではない。

すまいのすまい手より　富永彰子

金女史のパワーあふれる講演に息吹を感じ、小谷部女史の「欧米におけるエレクティブハウジングの実例」の紹介など、とても興味あるシンポジウムでした。

急速な変化が予想されるこれからの社会においてもやはり根本は家族形態であり、それを支えるのは住居であると思います。朴女史の「EACH & TOGETHER 」の概念の追求は共感を覚えました。

私の体験から申せば、親夫婦、子夫婦がお互いにまだ若いうちは、互いの生活を守るべく同じ敷地内の別棟に近い形態が望ましく、次第に親夫婦が年老いて、特に片方だけになった場合はそれとなくお互いの気持ちを感じながら生活できる住まい＝同じ屋根の下の住まいが必要になるような気がします。

昔から家は三度建て替えてこそ‥‥などと言われていますが、その上に新しい時代に合った三世代住居の要素が加わると、それこそ何度建て替えれば良いことになるのやら‥‥など、専業主婦はひとり言を言っています。女性建築家のご活躍を期待しています。

その意味で、今度のUIFAのシンポジウムは、より多くの人々が日韓の住まい・家族・社会を考え、また両国の比較を通じて自国の住まいを振り返ってみる良いきっかけであった。特に、それぞれの国で先頭に立っている女性建築家の目を通じ、作品を通じて、日韓の住まいにおける類似性と相違性を整理して頂いた場であった。ただ欲を言えば、皮相的な畳とオンドルの差を超え、あるいは直観的な体験を越えて、女性の眼でこそ見えるものが示せたらより素晴らしかったろう。

Union Internationale des Femmes Architectes Japon

UIFA JAPON 事務局

〒105 東京都港区芝公園3-1-8
芝公園アネックスビル㈱生活構造研究所内
TEL. 03-3459-0221

■ドラトゥールＵＩＦＡ会長来日記

㈶国際振興協会主催の“国際ｺﾝﾍﾞﾝｼｮﾝ・ﾃﾞｨｼﾞｮﾝﾒｰｶｰ”の招請とUIFA JAPONﾒﾝﾊﾞｰとの交流を目的にﾄﾞﾗﾄｩｰﾙ会長が'94 11月28～29日東京に滞在、公式行事の合間をぬって本会理事と第12回UIFA東京大会開催の打合せ、東京見学、会食が行われました。招請者は米、独、仏等10名、ﾄﾞﾗﾄｩｰﾙ会長は唯一の女性。東京でのセミナー、視察、歓迎ﾚｾﾌﾟｼｮﾝを皮切りに横浜、名古屋、京都、神戸、大阪の主要国際ｺﾝﾍﾞﾝｼｮﾝ 施設等６日間の視察の後、関西国際空港より帰国。国際ｺﾝﾍﾞﾝｼｮﾝ の世界とて少数派の女性ﾄﾞﾗﾄｩｰﾙ会長の日本への招請とその存在はひときわ輝いて見えました。

東京見学の目黒雅叙園は、第２回海外交流の会で取り上げた漆工芸等所蔵の美術工芸品を修復、復元、再生し新しい建物のインテリアに再利用を図ったもので、平井美蔓理事が５年余りの歳月をかけて手掛けた作品。ﾄﾞﾗﾄｩｰﾙ会長は説明に熱心に耳を傾け、座って試し、触って確かめ、“トレビアン”とその技術と、優れたデザイン性とその効果に惜しみなく賛辞を贈り、“ここでの素晴らしいデザインの仕事を国際ﾃﾞｻﾞｲﾝｺﾝﾍﾞ に推薦したい、UIFA会員によるこの作品を誇りに思う”と述べられ、実に有意義な見学会となりました。

京王ﾌﾟﾗｻﾞﾎﾃﾙの歓迎ﾚｾﾌﾟｼｮﾝには中原会長他３理事が出席、協会関係者、航空会社、各地の国際ｺﾝﾍﾞﾝｼｮﾝ 誘致担当者が集う中、ﾄﾞﾗﾄｩｰﾙ会長の鏡開きで華やかに開幕、UIFA日本大会を知ってか“私共の地で是非”と早くも誘致のお誘いを受けたりしながら二日間のﾄﾞﾗﾄｩｰﾙ会長との有意義な交流は終わりました。

■トピックス

第11回ＵＩＦＡ大会 '96.9月ハンガリーで開催

東欧初の万博開催に合せ、第11回UIFA大会は '96.9月ブタペストで予定通り開催が決定。準備が進行中とのこと、乞うご期待、及び会員の参加。

第12回ＵＩＦＡ大会 '98秋・日本で開催

'93 南ア大会で日本での開催招請を発表した第12回UIFA大会は、このほどﾄﾞﾗﾄｩｰﾙ会長の確認と理事会の議決を経て正式に決定。本年より準備委員会を発足させ本格的準備を開始。乞う会員のご協力。

松川理事ＯＥＣＤ会議で発表

本会理事松川淳子氏は'94.10月4~6 日、パリでOECD会議“WOMEN IN CITY”、“HOUSING, SERVICE, & THE URBAN ENVIRONMENT”に招請され「高齢社会の都市環境のあり方」について発表し、OECD加盟国他33団体、205人が参加。輝かしい会員の国際的活動として拍手。

■役員会の報告

第８回役員会（94年９月27日） 役員10名出席
日韓シンポジウムの詳細打合せ。高齢者住宅財団からの高齢者用集合住宅の研究会参加申出を受け、出席を決定。

第９回役員会（94年10月14日） 役員13名出席
日韓シンポジウムの最終打合せ。東京都女性財団の助成事業、及び高齢者住宅財団主催研究会の報告。

第10回役員会（94年11月24日） 役員14名出席
日韓シンポジウムの総括と討議。ﾄﾞﾗﾄｩｰﾙ会長訪日予定と今後開催予定の世界大会に関する状況報告。

第11回役員会（94年12月13日） 役員９名出席
第12回ＵＩＦＡ日本開催に向けての話し合いと東京都女性財団中間報告会の報告。

■広報だより

今年度のUIFA JAPONの活動は、「日韓シンポジウム」の開催をはじめ、“明日のすまいのあり方”がひとつのテーマとなっています。「高齢化」「バリアフリー」「女性の社会進出」「家族形態の変化」などの視点や、「each and together 」「ｺﾚｸﾃｨﾌﾞﾊｳｼﾝｸﾞ 」などの考え方が、シンポジウムやNEWSLETTER上にて明らかにされてきました。これらの切り口を通して私たちはどのような“明日のすまいのカタチ”を提案するのでしょうか？会員の方のご意見・ご提案をお待ちしています。